

山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹
させば流される。意地を通せば窮屈だ。とにかく人の世は住み
にくい。住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。
どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生れて、画が出来
る。人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。やはり向
う三軒両隣りにちらちらするただの人である。ただの人が作っ
た人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい。あれば人
でなしの国へ行くばかりだ。人でなしの国は人の世よりもなお
住みにくかろう。越す事のならぬ世が住みにくければ、住みに
くい所をどれほどか、寛容で、束の間の命を、束の間でも住み
よくせねばならぬ。ここに詩人という天職が出来て、ここに画家
という使命が降る。あらゆる芸術の士は人の世を長閑にし、人
の心を豊かにするが故に尊とい。住みにくき世から、住みにく
き煩いを引き抜いて、ありがたい世界をまのあたりに写すのが
詩である、画である。あるは音楽と彫刻である。こまかに云え
ば写さないでもよい。ただまのあたりに見れば、そこに詩も生き
、歌も湧く。着想を紙に落さぬとも瑤鏘の音は胸裏に起る。
丹青は画架に向って塗抹せんでも五彩の絢爛は自から心眼に
映る。ただおのが住む世を、かく観じ得て、靈台方寸のカメラ
に澆季溷濁の俗界を清くうららかに収め得れば足る。この故に
無声の詩人には一句なく、無色の画家には尺縑なきも、かく人
世を観じ得るの点において、かく煩悩を解脱するの点において
、かく清浄界に出入し得るの点において、またこの不同不二の